

# ぎのわんの 歴史・文化遺産を 歩く 其の13

はじめに

今回も、昨年十一月よりキャンブ瑞慶覧の斜面緑地を中心に、イメーグスケッチに描かれている文化財の現状などを把握する調査で確認されたことについて紹介します。

## ミーガー・ヒージャー

ミーガーは正面をきれいな石積で造られた湧泉であるとされていますが、現状では石積は確認できません。隣接していた両湧泉があったとされる場所付近では湧水の流れは確認できますが、戦後の改変などで湧水の流れ出る所が変わっている可能性もあります。また、ミーガーマーチと呼ばれる松があったとされるヒージャーガー南側付近には、現在アコウ



の巨木が自生しています。アコウの木は他の木の上で発芽・育成し最終的には、元の木を覆って枯らしてしまうことから別名「絞め殺しの木」と呼ばれています。今回アコウによって覆われ枯れてしまった木の一部が確認されています。ミーガーマーチの可能性もあり今後、詳しく調べする必要があります。

## ヤマガー

自然の湧泉で、付近には、「フニクンジャー石」(船を係留する石)や「ジンナト」という地名などが伝えられ、大昔この辺りは港だったことが想定されています。湧水が流れ出る所には、崩れています。若干の石積が確認されました。また、湧泉の近くには、高さ約一・五m程の琉球石灰岩の大岩が二箇所確認されています。これが「フニクンジャー石」なのかは、まだわかりません。

問合せ：文化課 ☎89314430



ミーガー



ヒージャーガー(※中央がアコウの木)



ヤマガー

# 茶ぐわーゆんたく

121

## 宜野湾の闘牛大会

宜野湾における戦前の闘牛は、真志喜地域を例にとると約2か月に一回(年に6回)、旧暦の行事に合わせて行われていました。旧暦の5月5日にも、大山などで闘牛大会が行われていたといわれています。

もともと闘牛は、農村の娯楽であり、各地域の牛頭と評議員が運営していました。勝負の勝敗は片方の牛が舌を出したら負けと判定され、勝った牛には手拭やモンジュール笠(※)が与えられたそうです。勝利した牛の持ち主や親せきたちは、闘牛場に集まり、その場でカチャーシーを踊って喜びました。

1941(昭和16)年頃からは、宜野湾の闘牛大会は入場料を取って行われるようになりまし。そうなる興行化が進み、より強い牛が求められた結果、闘牛と労役牛は区別されるようになっていきます。またその勝敗方法についても、一方の牛が降参するまで闘わせるムルオーラセーによって、判定されるようになっていきました。

強い闘牛の飼育には絶えず気を使い、牧草やキビの葉を与え、体を作るためのトレーニングを行っていました。そして大会前になると動きやすししまりのある体を作るため、米に卵や豆腐を入れ、牛に与えていました。



腹取り(技)攻撃で一瞬に勝負がきまる(赤道)  
1980(昭和55)年 写真集「ぎのわん」

宜野湾には普天間以外の地域に専用の闘牛場があり、闘牛大会は多くの観客を楽しませていました。その後、戦争の足跡が聞こえてくるようになると一時期行われなくなりましたが、戦後には各地に闘牛組合が結成され、再び盛んになりました。

※モンジュール笠 麦わらでできた平たく丸みをおびた笠

「宜野湾市史」への問合せ  
文化課 市史編集係(市立博物館内)

☎87009317